慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	エレーナ・フォルトゥン作「セリア」シリーズ 主要作品解題
Sub Title	Introducción a la serie de "Celia" de Elena Fortún
Author	坂田, 幸子(Sakata, Sachiko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2021
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 言語・文化・コミュニケーション (Keio University Hiyoshi review. Language, culture and communication). No.53 (2021.) ,p.63- 74
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20211231-0063

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

この著作物は著作権法によって保護されています／ This content is protected by the Japanese Copyright Act

エレーナ・フォルトゥン作「セリア」シリーズ 主要作品解題

坂田　幸子

はじめに

スペインの作家エレーナ・フォルトゥン Elena Fortún（1886-1952）が少女セリアを主人公として書いた一連の作品は，20 世紀スペインでもっとも成功を収めた児童文学作品のひとつとされる。実際，1928 年にセリアという少女が最初に子ども向け冊子のお話の主人公として登場してから 1 世紀近くがたつが，「セリア」シリーズの作品のいくつかは今でも版を重ね，書店の児童文学コーナーに並んでいる。1993 年にはスペイン国営放送がセリアを主人公としたテレビドラマを制作し話題となった。ドラマの脚本に協力したのは，20 世紀後半を代表する作家のカルメン・マルティン・ガイテである。彼女自身が幼少時に「セリア」の物語の熱心な読者だったという。

「セリア」シリーズは国民的人気を博したにもかかわらず，児童文学として分類されてきたがゆえか，長らく本格的な研究対象とはされてこなかった。しかし最近になって，作者エレーナ・フォルトゥンの未発表の作品や書簡集が刊行されるなど，この作品群と作者への関心と評価は高まるばかりだ。一連の作品は 1920 年代末から 1950 年頃までのスペイン激動の時代を背景にしてセリアとその家族や友人たちの運命を辿る「セリア・サガ」としても興味深いし，ひとりの少女を主人公としてその成長を描くビルドゥングスロマンとしても読める。規範や常識にとらわれない少女という主人公像は，のちの世代の女性作家の創作に影響を与えた。さらには，作者と主人公像を 1920 年代から 1930 年代前半にかけてのスペインの教育論やフェミニズム思想との関連で分析することもできるなど[1]，この作品群は多様な研究と分析の可能性に開かれているのだ。

本論では「セリア」シリーズの主要作品を取り上げ，多数の登場人物を整理し，各作品のシ

1）「セリア」シリーズ初期の 2 作品と当時の教育論やフェミニズム思想との関係については，拙稿「おてんば少女の輝いた時代―スペイン女性作家たちによる児童小説」（柴田陽弘編著『文学の子どもたち』，慶應義塾大学出版会，2004 年，pp.251-270）で取り上げた。

リーズ内での位置づけを確認し概要を述べることによって，シリーズの全貌をわかりやすい形で提示することを目的とする。

作者エレーナ・フォルトゥンの生涯と「セリア」シリーズ

エレーナ・フォルトゥン（本名エンカルナシオン・アラゴネセス・ウルキホ）は 1886 年，マドリードに生まれた。1906 年に結婚。夫は職業軍人だったが文学好きで，戯曲や小説を執筆することもあった。彼女のペンネームは夫の小説の主人公の名前からとったものだ。彼女自身は初等教育程度しか受けることができなかったが，リセウム・クラブという，スペインにおけるフェミニズム初期に重要な役割を果たした団体の会員となり，司書養成講座や外国語教室に通ううちに，みずからもペンによって自己表現したいという意欲を抱くようになる。もともと彼女は子どもたちの会話や行動を観察するのが得意で，それをメモに書き留めては周囲の人におもしろおかしく語っていた。その才能を見抜いたひとりの知人が，彼女を大手の新聞 *ABC* 紙を発行する新聞社に紹介したのがきっかけで，1928 年から *ABC* 紙の出している子どもむけ冊子 *Gente menuda* 誌[2] に短い物語や記事を連載開始。これらをもとにしてシリーズ第 1 作『セリアの言うこと』を発表したところ，またたく間に大評判となった。その後，スペイン内戦が始まる 1936 年まで，彼女は *Gente menuda* 誌に執筆した短い物語をもとにして，セリアを主人公とする小説を立て続けに発表していく。

内戦が始まると，エレーナ・フォルトゥンと夫は他の多くの知識人たちと同様に共和国派を支持する。だが 1939 年に共和国派が敗北すると，アルゼンチンの首都ブエノスアイレスに亡命。亡命先でも現地の雑誌に執筆をしたり，司書として働いたりしながら，セリアの物語の続編を書き続けた。48 年に亡命先から帰国したあとは，マドリードそしてバルセロナで執筆活動を続けるが，52 年に病のため亡くなった。

ではこれから「セリア」シリーズの主要 12 作品を選んで紹介する。その際，

- 作品には①～⑫の番号を振るが，配列は刊行順ではなく，それぞれの作品の背景となっている時代の順である。
- 各作品について，原題，邦題（仮），単行本としての刊行年を記したあと，あらすじと短い解説を付す。

2） Gente menuda とは，「ちびっ子たち」という程度の意味。

① *Celia, lo que dice*『セリアの言うこと』（1934）

【あらすじ】

作品の舞台は1927年頃のマドリード。セリアは7～8歳。セラーノ通りの家で両親と暮らす。裕福な市民階層で，自宅には家政婦や料理人のほかにイギリス人の養育係もいる。父親は事業を営み，母親は，作者エレーナ・フォルトゥンがそうであったように，リセウム・クラブの会員という設定で，外出することも多く忙しい。ストーリーの大半を占めるのは，セリアの空想癖や勘違いから起きるハプニングや悪戯だ。やがて弟が生まれるが，ある日，セリアの度を過ぎた悪戯によって弟があわや肺炎になるという事件が起こり，それを機に両親はセリアを寄宿学校に預けることに決める。

【解説】

本文はセリアによる1人称の語りで，セリアは時折，「ね，読者（lectora）のあなたならわかってくれるでしょ？」と読者に話しかける。作者はこうして7歳の少女セリアが1人称で同年代の少女の読者たちに親しく語りかけるという作風を確立した。作品の最後で寄宿学校に入学させられると決まった時にも，セリアは友人たる読者たちに対して「毎週日曜日に面会に来てくれたら，たくさんお喋りして，ずっと友だちでいようね」と話しかける。文体面としては，地の文を大胆に切り詰めて，短い会話文だけでテンポよく進めていくのが，「セリア」シリーズに一貫する特徴で，作品に生き生きとした臨場感をもたらしている。

もともと一冊の本として構想されたものではなく，子ども向け小冊子に発表された短い物語を単行本としてまとめたものであるため，ひとつの作品としてとらえれば構成面での弱さはあるが，フリア伯母とその息子で医者のヘラルド，ロドリーゴ叔父と黒人少年のマイモン，セリアの母親の乳母だった老女ドニャ・ベニータなど，のちのちの作品で重要な役割を担う「セリア・サガ」の登場人物たちが早くも揃いつつある。

② *Celia en el colegio*『寄宿学校のセリア』（1934）

【あらすじ】

作品の時代背景は1929年頃。セリア8～9歳。マドリード近郊の修道女たちが運営する寄宿学校に入学し，そこでもさっそくお転婆ぶりを発揮して修道女たちに叱られる。セリアは規律と従順を強いられる学校で退屈するが，村の少年たちと知り合い，学校を内緒で抜け出して彼らと遊ぶようになる。

両親は遠くに行っているので（事業のため中南米に行っていると推測される），彼女は他の少女たちのように夏休みを両親のもとで過ごすことができない。休暇中，セリアは革表紙のノートに自分の創作した物語をつづる。そのノートとは，父親がセリアに，空想物語を書くようにとプレゼントしてくれたものだった。だが級友がその大切なノートをふざけて井戸に捨てて

しまったので，セリアは激怒し，級友に石を投げつける。彼女は罰として子どもむけにリライトされた『ドン・キホーテ』を書き写すように命じられた。

物語の最後，ロドリーゴ叔父がセリアに会いにやってくる。彼はセリアの様子を見て，このまま寄宿学校にいたのではますます世間知らずの娘になってしまうと危惧し，すぐさま彼女を引き取ることを決意する。

【解説】

前作に続いて，セリアが読者に語りかける形式で物語は展開する。前述の村の少年たちと知り合った経緯を話す際にも読者に対して，「内緒にしておいてね，そうしたらどうやってこの子たちと知り合ったのか話すから」と語り，話者であるセリアが読者と秘密を共有することによって親密な共同体が形成される。

作品①では，セリアの人間関係は家族あるいは同じような社会階層の同年代の少女が中心だった。本作では，セリアは修道女たちの寄宿学校という閉ざされた世界に暮らしているにもかかわらず，その世界から出て，村の少年たちという性差も社会階級も超えた遊び仲間を得る。さらには，教会の塔の最上部まで登るなど，怖いもの知らずの行動で少年たちから一目置かれる存在となる。

セリアの夢見がちで無鉄砲な性格は相変わらずで，修道女たちからは rebelde（反抗的な）あるいは revoltosa（やんちゃな）と評される。あわせて，両親に会えない寂しさや，大切にしていた創作ノートを井戸に捨ててしまった級友への突発的な激しい怒りなど，前作に比べてセリアの性格造形が多面的になっている。

③　*Celia, novelista*『小説家，セリア』（1934）

【あらすじ】

セリアが創作した空想物語 2 篇が収められている。

セリアの両親と弟は寄宿学校に面会に来た後，“とても遠くに”行ってしまった。別れ際，父がプレゼントしてくれた革表紙のノートに，セリアは物語を書き始める。

空想物語その 1「サーカス団との冒険」

セリアは自分がサーカス団の一員になったと想像し，コウノトリのクリクラとともに，アフリカ，海底，天国へと旅をする。

第 1 話はおしまい。夏休みが終わり，帰省していた同級生たちが学校に戻って来た。セリアは自分の創作物語の出来に満足して同級生たちにノートを見せるが，皆から笑いものにされ，作品②で述べられたようにノートを井戸に捨てられてしまう。もう一度その物語を思い出して

書き留めたのが上記の「サーカス団との冒険」で，執筆する楽しみを覚えて第2弾として書いたのが次の物語。

空想物語その2「リタとリトの休暇」

主人公はロリータ（リタ）という少女とラファエリト（リト）という少年のきょうだい。両親がコチンチナという土地に出稼ぎで行ってしまったため，ふたりはそれぞれ修道女と修道士の運営する寄宿学校に入っている。クリスマスとなり，他の生徒たちがみな家族のもとへ帰省すると，帰省先のないリタとリトは冒険に出発する。ふたりは旅に出て，スカートを膨らませて飛ぶ魔女，サイズが伸び縮みする魔女の夫，さまざまな動物たちに出会う。

セリアは，リタとリトの物語を書きあげた後で読者にむかって，みなを楽しませるような創作作品を書くのは難しいと告白し，次作ではまた，自分の体験する出来事をありのままに語るから楽しみにしてほしい，と結ぶ。

【解説】

セリアが創作した（という設定の）2篇の物語はいずれも想像力が奔放に飛翔する感があり，ナンセンスなユーモアも可笑しく，とても楽しい読み物となっている。

④　*Celia en el mundo*『世間のなかのセリア』（1934）

【あらすじ】

作品の時代背景は1929～30年頃。セリア9～10歳。作品②の続きで，ロドリーゴ叔父がセリアを引き取る。

ロドリーゴ叔父は独身で，マドリードのセラーノ通りの屋敷に家政婦のバシリデスと使用人の黒人少年マイモンと共に暮らしている。叔父は彼女を日課の散歩やカフェでの会合などの社交の場に同伴するが，彼女は同年代の友人がいないので退屈だ。“地球の反対側”にいる両親からは毎週手紙が届くが，セリアは両親に会えないのが寂しくて仕方がない。一方，叔父はあいかわらずお転婆なセリアの言動に振り回される。

やがて夏となり，ロドリーゴ叔父はセリアを連れて南仏のリゾート地に避暑に出かけ，セリアは隣の別荘に来ていた同年代のフランス人少女ポーレットと知り合い，親友となる。

クリスマス・シーズンになると，ポーレットが田舎にある祖母の城にロドリーゴ叔父とセリアを招待してくれる。その城にはセリアの父も駆けつけ，セリアをどこかスペインの落ち着いた雰囲気の学校で教育を受けさせなければ，という話になった。

【解説】

勘違いや早とちりから生じるセリアの失敗やいたずらが次々と起きる点はこれまでと同様だが，両親と離れて暮らす寂しさ，あるいは同年代の友人がいない寂しさなどが，セリアの心に影を落とす。表面上は明るく天真爛漫なセリアだが，心の中にはいつもなにかしら喪失感を抱えているようだ。

⑤　*Celia y sus amigos*『セリアと友人たち』（1935）

【あらすじ】

作品の時代背景は 1931 ～ 32 年頃。セリアの父は彼女が落ち着いた環境で過ごすようにと古都トレドにある修道女たちの学校に入学させる。

海の向こうで両親と暮らす幼い弟から時々手紙が来るのをセリアは楽しみにしている。弟の名前はフアン・アントニオだが，セリアは彼にクチフリティンというあだ名をつける。

相変わらず家族と離れ離れなので，セリアはひとり遊びや悪戯に興じる。ある日，枯井戸に捨てられた子猫を救おうとして友人に怪我をさせてしまい，その結果，ついに学校を追放される。

セリアは，今は田舎に住んでいるロドリーゴ叔父のところへ預けられることになった。バスでの長旅で叔父の家に着いてみると，そこには昨夏，バカンス先で知り合ったフランス人少女ポーレット（←作品④）がいる。叔父はいつのまにか彼女の姉と結婚していたのだ。

夏，セリアの両親が海外から戻ってきて，パリ郊外に居を定める。父親がセリアを迎えに来て，ようやく家族揃って暮らせるようになった。ポーレットと彼女の両親もセリア宅に滞在し，さらにはセリアの母の妹であるセシリア叔母も 3 人の子どもを連れて滞在しに来て，冒険三昧のにぎやかな夏休みとなる。

楽しかった夏休みも終わり，セリアはふたたび親元を離れて寄宿学校に入ることになる。父親はセリアに「おまえはもう娘なんだから，子どものような真似をしてはいけないよ」と言い，セリア自身も読者にむけて「私はもう大きいの。子ども時代の冒険をいつまでもするわけにはいかないわ」と言って物語は終わる。

【解説】

相変わらずセリアの生活環境は，トレドの寄宿学校，どこかの地方のロドリーゴ叔父の家，パリ郊外の家と，めまぐるしく変化する。パリ郊外で両親や親戚と過ごす夏休みの場面では，子どもたちなりの理屈や心理が生き生きとした筆致で描かれる。

物語の構成としても，セリアと弟クチフリティンの往復書簡や，セリアの日記が挿入されるなど，シリーズ既刊にはなかった技法が用いられており，作品に変化をもたらしている。

⑥　*Cuchifritín, el hermano de Celia*『セリアの弟，クチフリティン』（1935）

【あらすじ】

作品の時代背景は 1932 ～ 33 年頃。「セリア」シリーズのスピンオフ。セリアの弟クチフリティンを主人公とし，フランスでのクチフリティンの悪戯やエピソードが中心。

クチフリティンはまもなく 6 歳。⑤の続きで，両親とフランスで暮らしている。セシリア叔母とその 3 人の子ども――長男で 9 歳のホセ・ラモンと幼い双子の妹たち――も一緒だ。クチフリティンはホセ・ラモンとフランスの学校に通うが，セリアに似て，やんちゃで悪戯好きの彼は学校でも家庭でもさまざまな騒動を巻き起こす。

物語の最後，季節は夏。セリアとクチフリティンの両親の事業が暗転したことが示唆され，両親は秋には戻ってくると言いおいて，あわただしく発っていく。クチフリティンとセシリア叔母の 3 人の子どもは，フリア伯母の家で夏を過ごすことになり，セリアも合流する。久しぶりに会うセリアは背も高くなり，すっかり大人びた風情なのだった。

【解説】

主人公はクチフリティンとなり，これまでのセリアによる 1 人称の語りではなく，3 人称の語りとなる[3)]。

⑦　*Matonkikí y sus hermanas*『マトンキキと姉妹たち』（1936）

【あらすじ】

作品の時代背景は 1934 ～ 36 年頃。「セリア」シリーズのスピンオフ。セシリア叔母の再婚相手であるトマス叔父の娘ソニアが主人公。皆はソニアのことをマトンキキという仇名で呼んでいる。セシリア叔母と双子の娘たち，トマス叔父とマトンキキの 5 人家族は，スペイン北部の町サンタンデール近郊の大きな屋敷に住んでいる。3 人の少女はいずれも 6 歳。思いやりがあって愛らしい双子に対して，悪知恵が働き，あつかましくて粗暴な振舞いをするマトンキキ。トマス叔父は実の娘のマトンキキを溺愛するが，セシリア叔母は 3 人の少女に等しく愛情を注ぐ。

主人公であるマトンキキと双子，セリアと弟のクチフリティン，そしてセリアの親友ポーレット……彼らの間で交わされる手紙が挿入されることによって，セリア姉弟やポーレットの近況も明かされる。セリアはマドリードの学校で司書になるのを夢見て勉強中，弟のクチフリティンはセシリア叔母の長男ホセ・ラモンとともにイギリスの寄宿学校の生徒である。

3）　クチフリティンを主人公とした作品はこのほかに 3 篇ある。

【解説】

作品⑥と同様，この小説も 3 人称の語りである。主人公マトンキキは「セリア」シリーズでは異色の登場人物で，ピカレスク的個性が際立ち，出色の存在感を示している[4)]。

またこの作品では，1935 年のアビシニア危機への言及があるが，具体的な時代背景や時事問題への言及もこれまでにはなかったことだ。作品⑤と同様，子どもたちが交わす手紙が挿入されている。小説の後半では子どもたちが互いにクリスマス・メッセージを交わすが，その文面から，翌年が 1936 年，すなわちスペイン内戦勃発の年であることが暗示される。

⑧　*Celia madrecita*『母親代わりのセリア』（1939）

【あらすじ】

作品の時代背景は 1934 ～ 36 年頃。1934 年（推定）の秋，セリア 14 歳。作品⑦の扱う時代と重なる。セリアの両親は事業が破綻し，セゴビアに住むセリアの母方の祖父を頼る。セリアはマドリードに住むフリア伯母の家から学校に通う。弟のクチフリティンはロドリーゴ叔父の経済的支援を受けてイギリスの学校。妹のテレシーナが生まれ，さらに末の妹マリア・フランシスラも生まれるが，母は出産の折に命を落とす。マドリードのセリアのもとにセゴビアの祖父から，「こちらに来て妹たちの世話をするように」との手紙が届く。セリアは泣く泣く学業をあきらめ，セゴビアで慣れない家事に戸惑いつつ，幼い妹たちの世話をすることになるが，好きな勉強を続けられなくなって強い喪失感を味わう。

父がスペイン北部の町サンタンデールで職を得たため，一家は引っ越す。しかし常に経済的に苦しく，セリアはみすぼらしい装いしかできないことを嘆く。ふとしたきっかけでホルヘという青年と知り合い，互いに好意を抱くが，交際には至らなかった。

サンタンデール近郊に住むセシリア叔母（←作品⑦）がセリア一家を屋敷に招いてくれて，セリアが気晴らしできるように近所の同年代の少女たちと引き合わせる。「セリア」シリーズの愛読者である少女たちは，それまで架空の人物だと思っていたセリアが今自分たちと話している実在の人物だと知り驚く。

最終章。セリア一家はセゴビアへと戻る。父は仕事のため，翌日，マドリードに行かなければならない。翌日は 7 月 18 日だ……[5)]。

【解説】

本作品は，スペイン内戦のさなかに書き進められ，内戦終結の年に刊行された。作品⑦までは，子どもむけ雑誌等にすでに発表された物語をもとに書かれたものだが，この小説は書下ろ

4）　マトンキキを主人公とした作品はこのほかに 1 篇ある。

5）　1936 年 7 月 18 日はスペイン内戦が始まった日にあたる。

しである。セリアによる1人称の語りで，全体に沈鬱な雰囲気が漂い，前作までとは一線を画す。彼女はもはや苦労知らずのやんちゃ娘ではなく，乏しい収入から家計のやりくりをし，家族の健康を気遣い，幼い妹たちの面倒を見，時には周囲の人の意地悪な仕打ちにも耐えなければならない。

小説技法の点では，セシリア叔母の家でのセリアの物語の読者とセリアの対面場面が興味深い。セルバンテスの『ドン・キホーテ』後編の，作品の愛読者である公爵夫妻がドン・キホーテ主従と会話する場面を彷彿とさせる。作品②でセリアはお仕置きとして『ドン・キホーテ』を書き写すように命じられた。作品②執筆時にエレーナ・フォルトゥンがどの程度意識していたのかはともかく，それ以降の作品を見てくると，はめ込まれた別の短編あり，あるいは副登場人物を主役としたスピンオフ作品あり，そして作品の愛読者と作中人物との対話ありと，『ドン・キホーテ』の小説技法を想起させるものがある。

⑨　*Celia en la revolución*『動乱のなかのセリア』（1987）

【あらすじ】

作品の時代背景は1936～39年。セリア一家がセゴビアの祖父宅に滞在中（弟クチフリティンはロンドンで勉強中）に内戦が勃発。セリアの祖父は反乱軍側に拘束されて射殺される。セリアとふたりの妹そして女中のバレリアナは命の危険を察してセゴビアを脱出し，マドリードに向かう。セリアの父は内戦勃発の前日に仕事でマドリードに出かけたままだったが（←作品⑧），内戦が始まると共和国軍に参加，負傷して入院する。

マドリードでは共和国側の過激分子により，市内のフランコ派狩りが行われていた。親フランコ派のフリア伯母と息子のヘラルドは共和国派の兵士たちによって処刑される。

1936年秋になるとマドリードを包囲したフランコ軍による空爆が始まる。さらには極度の食糧難。セリアの妹たちとバレリアナは疎開するが，戦争による混乱のため音信不通になってしまう。セリアは彼女たちの消息を訪ねてひとりでバレンシアやバルセロナへ赴く。その折，偶然にもサンタンデール時代の知り合いで，共和国軍の兵士となったホルヘと再会し，彼から愛されていると確信する。一方，セリアの父は快復するとふたたび共和国軍に復帰しバルセロナで任務に就くが，共和国側の敗色は濃厚だ……。

セリアは，妹たちがフランスに疎開したらしいをいう情報を得る。父もフランスへ逃れたらしい。そしてホルヘは戦闘で命を落としたと知らされる。悲嘆の中，彼女はフランスで家族を探し出し，一家で中南米に亡命すべく，バレンシアの港からひとりで船に乗るのだった。

【解説】

この作品はシリーズの中で唯一，作者の生前に刊行されなかった。内戦中に着手され，亡命先で書き上げられたものの刊行には至らず。作者が遺した草稿を没後かなり経ってから研究者

が入手し，1987 年にようやく刊行された。

従来の「セリア」シリーズとはまったく異なる，1 人称で語られる写実小説だ。空爆や市街戦の恐怖，凄惨な処刑，食料を得るための苦労などが，作者自身の体験や見聞に基づき生々しく具体的に語られている。セリアは，かつて作者の創造した幼い少女ではなく，今や作者自身の分身だ。セリアに仮託して作者がみずからの戦争体験を語ったこの小説は，現在ではスペイン内戦下の現実を仮借なく描いた作品，かつ当時の人々の日常生活についての貴重な資料として高く評価されている。2019 年には戯曲化されて舞台でも上演された。

⑩　*Celia instituriz en América*『アメリカ大陸で家庭教師をするセリア』（1944）

【あらすじ】

第 1 部

作品の時代背景は 1939 ～ 41 年頃。セリアの一家（父，弟，妹ふたり，女中のバレリアナ）は船でブエノスアイレスに到着する。ロドリーゴ叔父夫妻はすでに内戦前からそこで生活を築いており，弟は叔父夫妻に引き取られる。セリアと父は職探しに奔走するがうまくいかず，生活苦に陥る。やむなく父は薄給の仕事につき，セリアはドクトルと呼ばれる病院経営者の家で住み込みの家庭教師となり，ドクトルの親戚の娘ふたりの世話をする。娘たちは粗暴で反抗的だったが，セリアが語り聞かせる物語の魅力に引き込まれ，次第にセリアになつくようになる。

セリアの真摯な姿はドクトルに認められ，彼から求婚される。セリアはそれを受け入れるが，その直後，ドクトルは交通事故で亡くなってしまった。

第 2 部

セリアは傷心を癒すため，ボリビアとアルゼンチン国境地帯の遠方の地での住み込み家庭教師に応募する。そこは列車の駅からさらにラバで何日も密林を旅したところだった。セリアは油田開発の仕事をしているイギリス人夫妻の息子の家庭教師として働く。

やがて父からセリアに，安定した仕事を得て経済的な心配がなくなったからブエノスアイレスに戻るようにと連絡がある。さらには，戦死したものと思われていたホルヘが生きており，ブエノスアイレスまでセリアを訪ねてやってきたとも。

セリアはホルヘと再会する。

【解説】

1 人称の語り。アルゼンチンという国の広大さ，首都ブエノスアイレスの活気，習慣の違いを前にした戸惑い，亡命者が直面する生活苦など，いずれも作者自身が体験したものだろう。

第 2 部のアルゼンチンの奥地サルタの町からボリビア国境付近への旅では，ジャングルの自然風土や動植物の鮮烈な描写に作者の新境地がうかがえる。

⑪　*Celia se casa*『セリア，結婚をする』（1950）

【あらすじ】

セリア一家は，アルゼンチンに残った弟以外はみなスペインに帰国し，マドリードの親戚の家に身を寄せる。セリアのふたりの妹――パティータ（テレシーナの愛称）とミラ（マリア・フランシスラの愛称）――の賑やかな日常のエピソードが中心に語られ，それと並行して，セリアとホルへの交際，婚約，結婚準備が語られる。最後は，アルゼンチンから弟も駆けつけて，皆が再会しての結婚式となる。

【解説】

かつてのセリアを彷彿とさせる陽気でおっちょこちょいなミラが主人公で，ミラは1人称の語り手の役割をセリアから引き継ぐ[6)]。セリアはすっかり大人の女性になった。

ところで作品中でミラは「もうすぐ9歳になる」と書かれている。ミラが生まれたのは作品⑧から1934年でほぼ間違いないので，単純に計算すれば，背景となった時代は1942～43年だと考えられる。しかしこの作品に描かれているマドリードの様子などから推測すると，背景となった時代は，作者がスペインに帰国した1948年頃だと考えたほうが妥当だろう。

⑫　*Patita y Mila, estudiantes*『生徒パティータとミラ』（1951）

【あらすじ】

主人公は，セリアのふたりの妹パティータ（15歳）とミラ（11歳）。ふたりはバルセロナの学校に進学し，バレリアナが同居して姉妹の世話をしている。イギリスから，セリアが幼い頃の家庭教師（←作品①）のミス・ネリーもやって来た。パティータはかつてのセリアがそうであったように司書をめざして勉強中。まじめで内気なパティータとお茶目で好奇心旺盛なミラの家庭や学校でのハプニングが語られる。セリアがホルへとの間に生まれた赤ん坊を連れて訪ねてくるところで，物語は終わる。

【解説】

作品⑪に続いてミラによる1人称の語り。バルセロナは作者自身が亡命から帰国して1950年以降住んだところだ。作品の時代背景も1950年前後だと思われる。主人公ふたりの性格造形がはっきりしていて，小気味よく展開するストーリーも楽しい。刊行されるやベストセラーとなったが，1952年の作者の死によって，これがシリーズ最後の作品となった[7)]。

---

6)　ミラを1人称の語り手とする小説はこのほかに作品⑫を含めて3篇ある。

7)　生前に草稿のまま残されて，没後数十年たってから刊行された作品としては，本論考で紹介した作品⑨のほかに*Oculto sendero*（『秘められた小径』）がある。これは児童書ではなく苦悩に満ちた半自伝的小説であり，作者は主人公に仮託して，妻の創作活動を認めようとしない夫との確執や，みずか

本論考で参考にした「セリア」シリーズの版

- *Celia, lo que dice*, Biblioteca temática, Alianza Editorial, 1ª reimpresión, 2001.
- *Celia en el colegio*, Biblioteca temática, Alianza Editorial, 1ª reimpresión, 2001.
- *Celia, novelista,* Biblioteca temática, Alianza Editorial, 2000.
- *Celia en el mundo*, El libro de bolsillo, Alianza Editorial, 3ª edición, 2018.
- *Celia y sus amigos*, Biblioteca temática, Alianza Editorial, 2000.
- *Cuchifritín, el hermano de Celia*, Madrid, Alianza Editorial, 1ª reimpresión, 1994.
- *Matonkikí y sus hermanas*, Madrid, Alianza Editorial, 1993.
- *Celia madrecita*, Madrid, Alianza Editorial, 1993.
- *Celia en la revolución,* (Ed. de María Jesús Fraga e Inmaculada García Carretero), Biblioteca Elena Fortún, Sevilla, Editorial Renacimiento, 2020.
- *Celia instituriz en América*, (Ed. de Nuria Capdevila-Argüelles), Biblioteca Elena Fortún, Sevilla, Editorial Renacimiento, 2015.
- *Celia se casa*, (Ed. de Nuria Capdevila-Argüelles), Biblioteca Elena Fortún, Sevilla, Editorial Renacimiento, 2018.
- *Patita y Mila, estudiantes*, (Ed. de María Jesús Fraga), Biblioteca Elena Fortún, Sevilla, Editorial Renacimiento, 2019.

主要参考文献

- Blas Ruiz, María José. “Elena Fortún y la Editorial Aguilar”, https://antiguaeditorialaguilar.wordpress.com/2013/07/18/elena-fortun-y-la-editorial-aguilar/2021 年 9 月 28 日閲覧.
- Capdevila-Argüelles, Nuria. “Introducción” en Elena Fortún, *Oculto sendero*, Sevilla, Editorial Renacimiento, 2016.
- Dorao, Marisol. *Los mil años de Elena Fortún*, Cádiz, Servicio de Publicaciones de la Universidad de Cádiz, 1999.
- Martín Gaite, Carmen. “Pesquisa tardía sobre Elena Fortún” en Elena Fortún, *Celia, lo que dice*, Biblioteca temática, Madrid, Alianza Editorial, 1ª reimpresión, 2001, pp.7–44.
- Millard, María Luisa. *Vida de Elena Fortún*, Madrid, EILA Editores, 2019.
- Trapiello, Andrés. “La novela de unos y otros” en Elena Fortún, *Celia en la Revolución*, (Ed. de María Jesús Fraga e Inmaculada García Carretero), Sevilla, Editorial Renacimiento, 2020, pp.7–20.

らのセクシュアリティについて語っている（拙稿「スペイン児童文学の金字塔―フォルトゥン「セリア」シリーズ」（小倉孝誠編著『世界文学へのいざない』，新曜社，2020 年，pp.70–77）で簡単に触れた）。